

ニューカマー第二世代の青年期

—義務教育の経験と就職後の生活状況との関係に注目して—

The Adolescence of the Second Generation of New Comers in Japan:
their experiences in schools, jobs and communities

清水 睦美¹⁾

SHIMIZU Mutsumi

チュープ・サラーン²⁾

CHUOP Sararn

[要約] 本論文は、ニューカマーの第二世代の日本社会での有り様を、義務教育経験、転職傾向、経済状況、親世代との関係、同国人コミュニティとの関係等に注目しつつ仮説的に描き出すことを目的とする。用いるデータは、カンボジアとベトナムの第二世代の男性（二十代、計12名）を対象として行ったインタビュー調査で得られたもので、以下に示す事柄を仮説として提示する。

第1に、カンボジアグループでは、地位家族のもとで、「親に取り込まれる／取り込まれない」の分岐を示すと同時に、凝集性を特徴とするカンボジアコミュニティとの往還のあり方を多角的に描き出す。あわせて、それらを可能にする学校教育や地域活動から提供される資源との関係に言及する。

第2に、ベトナムグループでは、義務教育経験の良し悪しと、転職傾向の有無に一定の関係がみられること、「ベトナム人」というルーツを支える資源を家族以外にもつことで親子関係が良好に保てる可能性があることに言及する。

最後に、両グループを比較検討し、親子関係と結婚、特に「呼び寄せ」による結婚に至る可能性を指摘し、義務教育経験の良し悪しと転職傾向・学歴に一定の関係が見られること、抵抗感をもたないルーツの表出の条件に言及する。

1. 問題の設定

「ニューカマー」と称される日本に長期滞在する外国人が増加した1980年代以降、ニューカマーに関する調査研究が数多く行われ、教育分野においても「日本の教育と社会」のリーディングスにおいて、志水宏吉編『エスニシティと教育』（2009）が刊行されるまでに、研究が蓄積されてきている。一方、日本社会における外国人の増加という現象が始まって以来、およそ30年が経過し、親の移動に伴って来日し、日本の学校教育のもとで育った外国人の子どもたちも青年期後半から壮年期にさしかかりつつある。と同時に、日本生まれの外国人の子どもたちも青年期を迎えつつある。すなわち、日本社会においては、ニューカマーの第二世代が第三世代を育む時期を迎えているのである。しかしながら、このようなニューカマーの第二世代に焦点を絞った研究は多くはない。また、第二世代を調査研究の対象として選定しているものであっても、対象が「第

1) 日本女子大学人間社会学部教育学科

2) 日本大学大学院

二世代」という属性をもつものであったという意味を越えて、第二世代であることの意味を十分に検討材料としていない場合が多い。

この文脈において、先行研究として捉えておくべきは、オールドカマーである在日朝鮮人を対象とした福岡安則(1993)や金泰泳(1999)の研究である。福岡は、在日朝鮮人の若者世代のアイデンティティに注目し、「同化」と「異化」を軸として、「共生志向」「祖国志向」「個人志向」「帰化志向」を理念的に導き出すと同時に、調査結果に基づき、理念枠組みから漏れる「葛藤」タイプまでを含みこむ二世代のアイデンティティの多様性を明らかにしている。また、金は、在日一世と在日二世のアイデンティティの違いに注目し、一世が「民族」を基盤に「自由」を獲得していくのに対し、二世は、一世の獲得した「民族」に絡め取られることにより、ある種の「不自由」を経験していくということを明らかにし、「エスニシティ」をめぐる世代間葛藤を明らかにしている。しかしながら、在日朝鮮人を対象とした世代間比較を試みる研究は、アイデンティティ研究に限定される傾向があり、獲得される資源や資本、あるいは、生成される家族の物語に注目しつつ世代間の差異を明らかにするものは見当たらない。

一方、海外では、こうした観点に注目しつつ、世代間の違いに注目した研究も多く蓄積がある。管見の限りで、本研究のモデルとなりうるのは、まず、Zhou(1998)らによる、ベトナム人の子どもたちのアメリカでの成長過程を描き出した研究である。注目されるのは、ベトナム人の二世のライフコースを描き出すことにとどまらず、アメリカ社会におけるベトナム移民の社会的経済的位置づけというマクロな観点からの分析を加えることで、エスニックコミュニティの存在が、かれらの成長の有効な社会資本として機能することを明らかにしている点である。また、そうしたことを明らかにするために、かれらの獲得する言語・家族関係、地域社会、学校など、かれらを取り巻く環境を幅広く調査対象としている点も、本研究のモデルとなりうる。次にモデルとなるのは、Portesら(2001)の二世代の社会的成功を検討した研究である。この研究において注目されるのは、第一世代から相続される資本と二世代を取り巻く環境をもとに、調和的文化変容・文化変容への調和的な抵抗・不調和的文化変容・選択的文化変容といったタイプの分析枠組みを用いて、エスニシティ間の比較を、量的調査によって行っている点である。

本研究では、以上のような学術的背景を踏まえつつ、ニューカマーの二世代の日本社会での有り様を、エスニックグループ別に描き出すことを最終目標とするものであるが、本論文ではそれに先駆けて、ベトナム・カンボジアの2グループを対象として、義務教育経験、転職傾向、経済状況、親世代との関係、同国人コミュニティとの関係等に注目しつつ、その特徴を仮説的に描き出すこととする。

2. 本研究の調査対象者

本研究のデータは、親世代が外国からの移動の経験をもつニューカマー二世代を中心とするもので、ルーツ別にはベトナム6人、カンボジア6人で、二十代～三十代前半である。すべての青年が、義務教育段階を神奈川県の中央地区で過ごしており、調査者は、直接/間接とばらつきはあるものの、かれらの少年時代を知り得る関係にある。本論文は、本研究の出発点に位置するもので、本調査では男性のみを対象として行った(論文末資料参照)。

本調査のインタビュー項目は、移動経緯・言語・国籍・現在の家族構成・親世代家族・宗教・

母国とのつながり・在日同国人コミュニティ・学歴・仕事歴・学校経験・親世代との比較・将来展望・価値観等であり、これらをベースに半構造的なインタビューを行った。

なお、本調査は二世代ともくされる対象者にアクセスし、インタビューを行ったが、結果的には、1.5 世代である対象者も含まれることになった。そこで、本論文では、インタビュー対象者が、日本語の獲得の困難さを訴えるケースが多かったことから、子どもの言語や文化の形成には、9～10 歳のあたりに1つの境目があるという指摘(中島 2010)に基づき、「10 歳」を基準に、日本生まれに加えて10 歳前の来日を二世代とし、10 歳以降の来日を1.5 世代に分けて検討することとした。ただし、この分類は暫定的なもので、今後一層、詳細な検討をする必要があると考えている。というのは、例えば、Rumbaut (2002) では、現地生まれのみを二世代とし、15 歳未満の渡米をすべて1.5 世代として分類しているものもあるからである。今後、ニューカマーの二世代の有り様を描き出すという目標に照らして、1.5 世代との区分の指標の妥当性についてさらなる吟味が必要であると考えている。(清水睦美)

3. カンボジアにルーツをもつ二世代の青年期

調査対象者6名の親世代は、母国の内戦によりインドシナ難民としてタイの難民キャンプに逃れ日本に移動し定住することになったという共通した移動経緯をもっている。3名(C1,C2,C4)は日本生まれであり、3名(C3,C5,C6)は、難民キャンプで生まれているが、2名は幼児期に、もう1名は7～8歳の時に来日している。6名とも日本語を第一言語としており、母国語のレベルはC2,C3,C5,C6は簡単な日常会話程度であり、C1,C4に関してはほとんどできない。6名の最終学歴についてC1,C5は大学卒、C2は専門卒、C4は高校卒、C3,C6は高校中退である。

6名の経済状態として現在のところ生活に「貧困」を確認できる状態にあるものはいなかった。6名中4名(C1,C3,C4,C5)が「正社員」という雇用形態を獲得している。C2は「一人親方」として働いており、定期的に仕事もあるが、C6は自営業としつつも、「仕事の話があると仕事に行く」といった不定期な働きかたをしている。ここ3ヶ月は大きな仕事の話はなく、利益もないようである。ただし、親族コミュニティの結束が強く、彼自身が困れば、親族の中の誰かが助けるという関係があり、「貧困」から逃れられている。

結婚については、C3,C5は既に妻子がおり、妻はカンボジアからの呼び寄せである。他の4名(うち、1名は日本人妻との離婚歴あり)は現在のところ結婚の見通しはないと話し、そのうち2名(C2,C4)は結婚する際に国籍は問わないとしている。他方、C1は、母国語ができないことを問題にしているため、カンボジア人をパートナーに選ばない可能性が高い。現在、義務教育段階を過ぎた地域、いわゆる「地元」に残っているものはC5,C6であり、残りの4名は親世代が一戸建てを買い、「地元」を離れている。またC1,C5を除く4名は、現在も親と同居をしており、給料のいくらかを生活費として家に入れている。4名とも親との同居に不満を感じている様子はなく、むしろ「らく」と思っているようである。

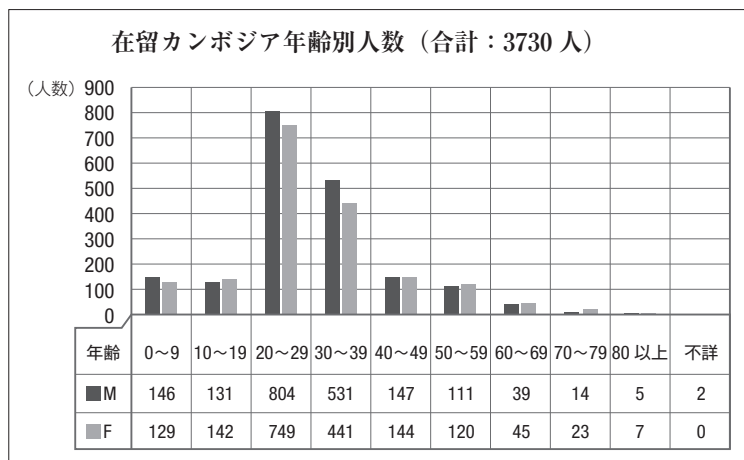
以下では、このようなかれらの青年期に関係するかれらの経験として、特徴的であったことに焦点をしばって検討することとする。

4-1 在日カンボジア人の特徴

(1) 凝集性

2013年12月現在、法務省の調べによると、在日カンボジア人のうち「定住」「永住」「永住者の配偶者」「日本人の配偶者」の在留資格を有する者は1901人で、居住地は関東圏に集中している。特に神奈川県においては1605人と突出しており、県内では、横浜市が最も多い326人で、次に、相模原市、平塚市、大和市、厚木市と続く。そもそも神奈川県には難民受入れ施設である「難民大和定住促進センター」があり、ここが来日当初の居住地であったことが、神奈川への集住という現象を生じさせている。

また、2014年6月時点の在日カンボジア人(すべての在留資格を含む)の年齢分布(図1)を見ると、20代~40代に集中していることがわかる。統計上確認することは難しいが、年齢分布から推測して、半数は80



~90年代にインドシナ難民として親が来日し日本で子どもを産み、その子どもが成長した年齢と考えることができる。そして残りの半数は、在日カンボジア人が、カンボジアに残した子どもを呼び寄せる、あるいは成長した子どもが結婚相手として妻・夫を呼び寄せて

いると考えることができる。これらの点は、本調査対象者に照らしても、妥当な推測と考えられる。

このように人口動態としてみても、カンボジア人コミュニティの凝集性は高いのだが、これに加えて難民としての経験がその凝集性を推し進めている。カンボジア難民は、内戦で国を逃れるため陸路を家族単位で移動しており、移動の途中で他の家族と知り合いになったり、助け合ったり、難民キャンプの生活で親密な関係となる場合もある。加えて、来日後もその関係が継続するだけでなく、センターで一定の期間を過ごしたりすることでさらに深まることもある。このような凝集性の高さをカンボジア人コミュニティは有しており、その中で第二世代は成長していくことになり、こうしたコミュニティとの関係の切り結び方が問われることとなる。

(2) 地位家族

カンボジアは小乗仏教の国であり、どの家庭にも神棚があり正月やお盆になると御線香やお供え物をする。この点についてインタビュー対象者の親たちは比較的厳格に遂行しているようである。

一方、日本生まれの第二世代の子どもたちは、宗教的儀式とは無縁な生活をしている。しかしながら、宗教的儀式と距離を置きつつも、その精神のもとで、年下は年上に対して「敬う」、あるいは、年上に身勝手な意見を言わないということに関しては、カンボジア人コミュニティでは当たり前のこととされている。そしてそれは親子関係においても強固に守られており、そのこと

は翻れば子は親に従属した関係のもとにおかれているともいえる。

このことは、カンボジア人家族の「地位家族」という特徴として一般的に知られているが、第二世代にとっても、かれらの親との関係はそれに近いかたちで表出している。その上、親の日本への移動の過酷さを多少なりとも知っているかれらにとって、親は無視できない存在として位置づいている。さらに、そうした無視ができなければできないほど、親と子の地位的な関係は強固なものになる。加えて、子どもの方が親より日本語ができることにより、日本での生活において親が子に依存する傾向は、親子の地位的関係を親が利用した結果でもある。

また、結婚する場合においても、カンボジア社会では「ロマンチック・ラブ」にもとづく観念は浸透しておらず、依然として見合い結婚が規範として残っており、いまだに前近代的な家族慣行が根付いている。このような見合い結婚には、親や親戚が深く関わっており、親子の地位関係を保つ働きをしているのである。

このような地位的な親子関係のもとで、第二世代は成長し、その関係をどのように再構築するのか／維持するのが問われることになる。

4-2 第二世代の経験の諸相

(1) 良好な義務教育経験

彼らの小中学校における経験については、比較的「良かった」と回想しており、友達もいて楽しく過ごすことができたと話す。その理由は、かれらの通う小中学校の特徴として、多くの外国籍の子どもたちが在籍することによって、カンボジア人であることを表出しやすかったからであると推察される。また学校の先生に対する印象は、学習の面倒や遅刻しないような細かい配慮を得られることによって「助けられた」と好印象をもっている。以下では、もう少し詳しく、かれらの学校経験を見ていくこととする。

C1とC2の出身中学校は、外国籍の生徒が多く在籍しており、そのような生徒に対して日本人生徒と区別し、比較的手厚い支援をしているという特徴をもっている。そのため、学校経験は「良かった」と表現するその「良い」における意味合いが違っていると考えることができる。なぜなら、C1,C2,C6にとって中学校は、外国人として自分を表出することを大事とされ、外国人であるがゆえに持てない親の資源を、学校の先生たちが手厚くケアすることによって持ちえたと言っても過言ではないからである。そうした手厚い支援は、特にC2においては、高校は定時制高校に通っていたが、学期末試験や進路相談を中学校の時に特に面倒を見てくれた先生のところへアドバイスを得ていた。C2にとって、困ると自分の戻る場所があり、それは中学校時代にお世話になった先生との関係でうみだされている。

一方、C3,C4,C5の中学校も外国籍の生徒が多く在籍する中学校であったが、特別に外国籍生徒に対して手厚い支援やケアはなく、唯一日本語習得に時間が必要な生徒が通う「国際教室」への取り出しのみであった。C3、C4はそのような学校の先生の手厚い支援を指して学校経験が良かったと表明しているのではなく、どちらかというと、外国籍が多くいてそれによる「安心感」があったという捉え方なのである。そうした「安心感」は場が変わると「不安定」なものとなる。C3、C4はその後高校に進学するのだが、外国籍生徒の少なさに最初は戸惑いがあり、C3に関しては「外人俺1人だったから恥ずかしかった」と思っていたが、友達ができたり、担任が気にか

けてくれたりしているうちに、そのような気持ちは次第に和らいだと話す。

(2) 「地位家族」の中での位置取り

調査対象者6名はすべて、親世代がなぜ日本で生活する事になったのかについて、ある一定の知識を持っている。かれらが共通して親の移動経緯を説明する際に使用する単語は、「戦争」「難民」「難民定住促進センター」であり、親の移動を悲惨な状況を乗り越えて日本に移住していると認識しているためか、親との関係も良好である。また、親子の間で使用される言語は、日本語が中心で、時々カンボジア語が会話に混ざる程度であることから、子の第一言語は日本語であることがわかる。このような親子関係において共通点を持つ第二世代であるが、「地位家族」の中での子の位置取りについては違いが見られる。

① 親に取り込まれる者

現在も両親と同居しているものは6名中4名(C2,C3,C4,C6)であり、「いずれ両親の元を離れる」と展望しているが、まだ確かな見通しはたっていない様子であった。そうした4名が親元を離れずに同居が可能となっている要因として、家から職場まで通える距離にあるということと、実家においても親たちによって自分たちの行動が制限されずにわりと自由にさせてくれているということ、親から自立して生計を立てるということを自分あるいは親がそれほど強く求めていることが考えられる。親と同居している4名は生活費としてお金を家にいれている。

さらにこのような安定的な親との同居は、職場探しの時にある程度の資源を親が提供してくれているようである。4名中3名(C3,C4,C6)は、転職経験において一度は親あるいは親の友人の紹介で職場を紹介してもらった経験がある。このように、地位家族のもとで親と同居し、かつ、親の資源によって職場を紹介してもらった経験をもっている者を、「親に取り込まれる者」としてここでは捉えておきたい(なお、C2は、ここから除外するため、後に分析する)。こうした親の取り込みは、例えばC3のように家族のために高校を中退するという選択をさせることになる。そのため、家族の外で得られる資源が不足すると同時に、母国的な親の考えを頼りとして、職探しは地元仲間や両親の斡旋によって得ることとなり、新たな資源獲得先としての日本社会には至らない。つまり、地位家族のもとにあるということは、「凝集性」を特徴とするカンボジア人コミュニティにとどまることを意味し、それによってもたらされる広がりがない繋がりや経験によって、彼らは親もとに留まり、結果的に親に取り込まれることで職場の提供や同居をするという親子関係を維持しており、そこである種の「安定」を得ているのである。

② 親に取り込まれない者

一方で、「親に取り込まれない者」として捉えうるのは、親から独立して生計を立て、かつ、親の資源によって職場を紹介してもらわなくても、学校の先生や地域の日本人ボランティア、外国人当事者団体(すたんどばいみー)、リクルート会社などの資源を活用しうる者である。

ここにおいてC1,C2,C5があげられる。C1は、現在都内のIT企業で働いており、今年で5年目をむかえる。地元を離れてアパートを借りて一人暮らしをしている。月に2回ほどC1は、高校生から参加している当事者団体「すたんどばいみー」(以下、「ばいみー」と略す)の活動に参加するため、地元に戻る。地元に戻る際は、実家にもより家族との時間を過ごす。こうしてC1は、都内で社会人をしている傍ら、地元の当事者団体の活動に携わっているのである。C1は転

職経験もなく、大学在学期間中に企業インターンを経験し、卒業後はインターン先で就職している。彼の両親、特に母親は日本語が堪能である。一方C1は母国語がまったくできず、両親との会話は日本語である。C1は、中学まで母子家庭で育ったため、一人で四苦八苦している母親を傍で見ていたため、一般的に反抗期と言われる中学時代においても、反抗というような感情はなく、むしろ苦勞している母を「支えなくちゃ」と思っていたと話す。

C5は呼び寄せによる結婚を果たしており、既に3人の子どもがいるが、親とは同居していないものの親が暮らす同じ県営団地で生活しており、親との交流は頻繁にある。7歳か8歳の時に来日しており、小中学校時代は地域のボランティア教室に通いながら中の上の成績を取っている。特に中学生の時は、地域のボランティア教室に通っていたのだが、そのまじめさゆえに教室で教えていた日本人スタッフに教室外でも個別で支援を受けられていた。その後は当事者団体の立ち上げにも携わり、現在も仕事の傍らで活動に継続して参加している。C5は大学に進学し、学校の求人情報で日本の製造会社に就職しており、過去に転職経験はない。C5は子どもをカンボジア人として育てることを考えており、名前も日本名ではなくカンボジア名を付けたと話していた。こうしてみると、C5は子どもを育てる環境においてカンボジア人コミュニティが多く集まる場を戦略的に選択していると捉えられる。C5は自身もルーツを肯定的にとらえてきており、子どもにも自分と同じようにという思いが伺える。

C2は、転職経験があるがどれも自力でハローワークやタウンワークによって職探しを果たしている。つまり、C2は転職の過程において親を頼るということではなく、自力で職場を獲得してきた。C2には2つ上の兄がおり、その兄は親の紹介によって仕事に就けていることを考えると、C2もいざとなった時に親の資源に頼るということが考えられる。しかし、現在のところ、彼が親に頼るというよりも親がかれに「いろいろと頼りにされている」ようで、そのような関係においてしばしばC2の意見が親に影響を与えているようである。その意味で、C2は親と同居しているものの、既に、親子の地位関係を組み替えていると解釈できる。

(3) コミュニティとの往還の様子

最後に、凝集性を特徴とするカンボジア人コミュニティに対する二世代の位置取りを検討しておきたい。

まず、本調査対象者は、すべて「いちょう団地」という外国人集住団地として広く知られているところに居住経験をもつものである。その中で、親が住居を一戸建てにすることによってコミュニティから一旦離れるもの(C1,C2,C3,C4)と、団地に住み続けてコミュニティに留まるもの(C5,C6)に区分することができる。6名中4名(C1,C2,C3,C4)の対象者は小中学校時代まで地元であるいちょう団地に住んでおり、高校入学を境に親が一戸建てを買って団地を出ている。C1,C3,C4の3名の親が買った一戸建ては、団地から車で30分以内のところにあるため、団地にいるカンボジアコミュニティに用事がある場合は、比較的簡単に來ることができており交流関係も維持されている。一方、C2の親は団地から1時間程度のところに一戸建てを買って生活している。このようにコミュニティから出た経験をもつ親世代は、親の日本語能力が比較的高い傾向にあり、逆に低いものがコミュニティに留まっている傾向にある。先に述べたように、6名のうち4名(C1,C2,C3,C4)は、親は日本語をできると評価しているように、日本語能力が高いほどコ

コミュニティ内でなくコミュニティの周辺に住居をかまえ、コミュニティとの関わりを部分的に活用しているのである。

ただし、親がコミュニティから出たからといって、子世代のカンボジア人コミュニティとの関わりがなくなるわけではない。そこで、親世代と子世代のカンボジア人コミュニティとの関わりをみたものが、図2である。まず、親世代がコミュニティを出たとしても、子世代がコミュニティを頼る傾向

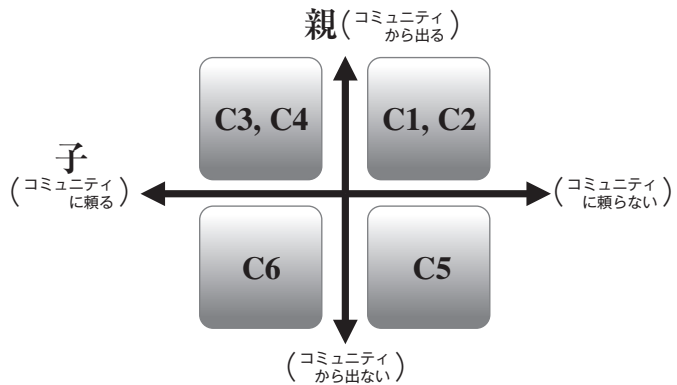


図2 親世代と子世代のカンボジア人コミュニティとの関わり

（C3、C4）が見られ、仕事探しにおいてコミュニティの資源が使われている。他方、親世代がコミュニティを出ているが、子世代はコミュニティの資源を頼りにしていない場合（C1、C2）には、子は自力で仕事を探している。その場合には、学校や「ばいみー」といった資源を利用している。特に、C2のように卒業した中学校の先生や、仕事先の日本人によって新たな仕事の情報を得るといった過去の関係と現在の関係を上手に活用しているものもある。

続いて、親世代がコミュニティを出ていない場合を検討したい。こうした場合にも、子世代がコミュニティに頼らないというC5のようなケースがある。C5の場合、子どもをカンボジア人として育てることが起点としてあるので、コミュニティを出ることは想定しにくく、彼にとってコミュニティは子育てにおいて必要な場であると考えられている。他方、自身の仕事は大学での就職活動で獲得したものであり、以後の転職もない。仕事上の悩みを抱えつつも、学校時代を支える資源の提供先としてあった地域ボランティアスタッフや「ばいみー」という存在が、現在もかれの悩みの相談先となっているのである。

なお、付言しておくとして、コミュニティを頼らない3名は、C2は専門卒でC1、C5は大卒という学歴を有しており、このように学歴があるものはコミュニティ以外の新たな資源の獲得先として広がりを持っていると考えることができる。また、C6については、親世代も子世代もコミュニティにとどまっているケースである。かれは27歳に至るまでに7回の犯罪歴をもっており、学歴も高校中退であるために、定職に就くことが困難な状況にあり、現在は「自営」をかがけ、コミュニティ内部の隙間の仕事を請け負っている。かれのような場合には、コミュニティに頼るしか方法がないということであることが想像される。（チューブ サラーン）

4. ベトナムにルーツをもつ二世世代の青年期

調査対象者6名は、親世代が難民として日本に移動したものの、もしくは、自分自身が幼少期に難民として日本へ移動したものの、あるいは、ベトナム戦争の影響を受けて日本兵であった祖父の祖国である日本への移動を果たしたものであり、いずれもベトナム戦争に起因するインドシナ難民と関連して来日しているという点で共通している。内訳は、親の移動後に日本で生まれた者が3名（内1名は、日本人との国際結婚による誕生）、1名は移動途中のインドネシアでの誕生、2名はベトナム

ム生まれで、6-7歳あるいは8歳という幼少期の来日であり、いずれも第二世代である。

ただし、調査対象者6名のうち5名は第一言語を日本語としているが、残り1名(V6)は、第一言語がベトナム語である。V6は、母親とそのきょうだいとともに船で脱出し、マレーシア(2年滞在)を経由して、8歳の時に来日している。その後、品川の国際救援センターで4ヶ月を過ごした後、「あちこちいった」と話す様子からは関東圏を転々として、いちよう団地に入居し、小学校4年生後半に編入学している。このように母親のきょうだい(叔父)と移動をともにしていることからベトナム人コミュニティとの結びつきも強く、かつ、日本の学校への編入学が10歳であることから、本論文では1.5世として分析することとする。(本稿では詳細を省略する)

(1) 第二世代の対象者(5名)の現在の様子

①言語環境

対象者5名は、「ベトナム人」としての表出を、積極的/消極的という違いはありつつも、現在の生活の中で何らかの形で行っており、「ベトナム人」であることを隠しているものはいなかった。一方で、ベトナム語の使用に関しては、親子間での話す・聞くレベルに留まっており、先に述べたように5人全員が第一言語を日本語としていた。したがって「ベトナム人」という社会的表出をしつつも、言語的には日本語の世界に住むという状況にあることがうかがえた。

ただし、だからといって、日本語に不安がないわけではない様子もうかがえた。最も日本語が「堪能」と判断ができるV1であっても、日本語のニュースは「何言ってるんだ、これ?」「どういうこと?」のようなものがあり、「聞く」ことに抵抗観があると話す。また、V4のように母親が日本人であり、家庭内でも会話が日本語であるような場合であっても、日本語に強い不安感を示している。インタビューにおいて事例としてあげられたのは、運転免許取得する際の「徐行」という言葉に、「徐行って何だよ」「初めて聞いたよ」という経験があり、それ以来「それってどういう意味ですか」って聞くようにしているという。

②生活の状況と直面する課題

経済状態としては、現在のところ、生活に「貧困」を確認できる状態にあるものはいなかったが、転職経験の多いものは、親や同居人の支援がなくなると貧困に陥る可能性が十分に感じられた。特に、V3は、離職を繰り返しており、現在の仕事は10回目の転職である。加えて、親・兄との間に軋轢があり、「居場所がない」「一時的に、死のかわってというのは何回かあったし、どうやったら一番簡単に死ぬるかっていう考えが多かった」と話し、涙を流す場面もあった。現在はネットのゲームで知り合った茨城県の日本人男性のもとで比較的安定した生活を送っているが、その人との関係が良好でなくなった場合の困難さが危惧された。

そうした中で、現在、直面している課題としてかれらが提示したのは、仕事と結婚であった。仕事で問題をあげたのはV4、V5で、現在の仕事で必要としている日本語での文書処理の困難さであったり、リーダー的ポジションについたものの部下をまとめることの困難さであったりした。しかしながら、いずれも転職経験をもっておらず、仕事を継続する上での力量アップとして、その課題を語っていたところに特徴がある。

他方、結婚問題を課題としたのはV2である。V2は転職傾向があり、現在の仕事について1年半が経過し、安定期に入った様子で「今後、心配になることが予想される問題」としてあげた

のが、結婚であった。現在、交際しているのは日本人女性であるが、その女性との結婚話が出つつも決めかねており、親が勧める「呼び寄せ」による結婚も選択肢に入れており、「見ている限り、お母さんの面倒を見たりとか、ベトナムの人ってすごく尽くすらしいんですよ。家事のことも全部やって、なおかつ、仕事にも行ったりとかしているから、頭では、俺も長男だしベトナムの人と結婚したほうがいいのかないかなというのがあります」と話しており、そこには同居しつつも疎遠である親子関係の回復を願っている様子がうかがえた。

(2) 第二世代(5名)の経験と現在の関係

上述のような第二世代の現在の状況は、かれらの義務教育段階での経験や環境と、どのような関係があるのだろうか。現段階では事例が少ないため、本論文では仮説的な提示を試みることにする。

①義務教育経験の良し悪しと転職傾向

5名は、日本の義務教育経験において、良好であった者(V1・V4・V5)と良好でなかった者(V2・V3)に大きく分かれた。良好であった者のうち2名(V1・V4)は、当時、当該地域のS中学校が、「外国人生徒のためのカリキュラム」(清水・児島2006)を実施していた時にS中学校に在籍していたものであり、「思い出深いのは全部中学校」「濃い3年間だったな」と「勉強以外は楽しかった」「(面倒)みてもらっていましたね。特に〇〇先生」という言葉で表現している。興味深いのは、面倒を見てもらった先生の名前を覚えていて、数名の先生の名前が確実にあがることである。また、S中学校の学区再編により近隣のB中学校に入学することになったV4の場合でも、S中学校での実践の影響があった地域でもあり、比較的學校経験は良好であった。「学校はとても楽しかった」と話しつつも、小学校の先生は「まあ」好きだったとしつつも、中学校の先生は「あまり」好きではないと語る。ただ、唯一、複雑な家庭の事情を話すことになった中学2年生の時に担任は、記憶の中に留まっていた。

他方、良好でなかった者の中で、V2は、ベトナム人であることを「高校までは隠していました」、親には「遠足とか、授業参観とかは、あんまり来てほしくなかったです」と語っている。そうした様子も、高校になると「吹っ切れていた」といい、その後はベトナム人であることを隠すスタイルをとらないように変化したという。また、V3は「とても」いじめられたと話しており、そうした学校経験を理解してくれる教員もいなかったようである。高校時代には「先生とも相談したりはしていた」と語っているにもかかわらず、結局中退をしている。

このように、義務教育経験が良好であった者となかった者がいるわけであるが、興味深いのは、今回の調査対象者に限って言えば、義務教育経験の良し悪しが、就職後の転職経験の回数の多さと関連している様子が確認されることである。義務教育経験が良好であった3人は、初職を現在も続けており転職経験をもっていないのに対し、良好でなかった者は、V2が6年間で4回、V3は6年間で10回を数え、短いときは1週間や1ヶ月があり、「何か続かないっていうか」と話している。

仮説的ではあるが、第二世代の子どもたちにとって、学校経験は家族の外の社会への入口となっているようで、学校経験がよいことは、言語に不安を抱えつつも参入した社会がうまく受け入れてくれたことを意味し、それがその後に出会う社会への障壁を軽減するように影響しているよう

である。対象者の中で、V1は最も学校経験が良いと判断される者であるが、「中学校の3年間がだいぶ濃かったおかげで、今でも、こうやって友達にも恵まれているし、かわりもあるのかなって気はする」と語っている。

②「ベトナム人」というルーツを支える資源と親子関係

先に述べたように5名は、インタビュー時において「ベトナム人」であることを隠しているものはいなかったが、そのようなルーツを表明することを支える資源としては、何があるのだろうか。ここでは、「ベトナム人」という社会的表出を支える資源として、親の存在以外があるかどうかを検討することとする。

ここで、ルーツを表明することを支えるものに「資源」という枠組みをあてるのは、ウォルマン(1996)の『家族の三つの資源』にヒントを得たもので、志水・清水(2001)においても、家族関係と学校適応の関係を、家族の資源システムを媒介として説明している。

先に述べたように、S中学校出身者は「外国人生徒のためのカリキュラム」の実践を通して、「学校」が積極的にルーツを表明することを支えていた。本調査では、当時行われていた「選択国際」の授業に言及するものはいなかったが、「今の自分に最も影響を与えた」という点に関わって、まず「中学校」をあげることから、学校がルーツを表明する資源となっていたことは容易に想像される。

また、S中学校での実践と平行して、地域の外国人の子どもたちによる自治的運営組織「すたんどばいみー」(現在、外国人当事者団体「すたんどばいみー」、以下「ばいみー」)にも、かれらのすべてが何らかの形で関係している。特に、高校受験の時期になると、「授業が終わったあとに、そこからずっと勉強していた感じがありました」と語られるように、生徒たちの中には「学校」と「ばいみー」の間の明確な区切りがなく、両者がともに外国人であることを支える動きをしていたことがわかる。また、小学5年生から受験まで「ばいみー」の活動に参加していたV4は、「受験のときに一番よかったなと思いますよ。願書を書くときに、多分、ばいみーのユミくんとかに聞いた」と話し、さらに「ばいみー」での活動を、高校受験の自己アピールとして書き、「ばいみー」による支えが大きいことがうかがえる。「ばいみー」は、外国人の集住団地として知られる神奈川県いちょう団地で、外国人の子どもたちによって運営される団体であるから、そこに参加することは「外国人」を表明することと直接つながっており、資源の一つと考えられる。

「学校」「ばいみー」以外をあげたのは、V1の「教会」である。V1は、高校進学後「ばいみー」の活動から離れ、教会の青年部での活動に積極的に関わるようになったという。彼によると、もともと教会には「親が行くからついていくみたいな、そういう感じで行っていて、正直、あんまり行きたくなかった」という。しかし、短大生になった時に、中高生グループでリーダーとなる大学生に「一緒にやろうよ」と誘われて参加するようになり、それは教会のミサよりもずっと「楽しかった」という。中高生グループは、日本、ベトナム、南米、フィリピンの子どもたちから構成されていて、V1は、その活動に参加していた日本人女性と結婚している。彼にとって「ベトナム」というルーツは、結婚相手との関係においても、その真ん中に配置をするものの一つとして位置づけられていた。

上記のような「ベトナム」というルーツを支える資源が複数ある者もいれば、他方には全くな

い者もいる。V2は、「ばいミー」を紹介されて中学2年か3年の時に顔を出す、それは「1年はなかった」と話す。その後は塾で受験勉強をしており、「ベトナム人」という社会的表出を支える資源として機能していない。

このように、「ベトナム人」であることを支える資源がある者となない者がいるわけであるが、興味深いのは、今回の調査対象者に限って言えば、ルーツを支える資源の有無と親子関係の良し悪しにも関連があることが示唆されたことである。同居・別居を問わず親と積極的な交流をしている者は、ルーツを支える資源が多いのに対し、同居であっても親との交流が乏しいV2は親子関係が良好とは言えない。このようなV2の現在抱えている課題は、先に述べたように結婚であるが、結婚相手を「呼び寄せ」によるベトナム人とすることによって、現在の希薄な親子関係の解消が意図されてもいる。他方、「ベトナム人」であることを支える資源を得てきたものであっても、V3のように親世代が一戸建てを購入したことにより、これまでに得ていた資源を受けられなくなると、親子関係さえもが希薄化していく傾向も見られる。ただし、V2・V3はともに学校経験が悪いという共通経験もあるので、このあたりの関係については事例を重ねて検討する必要がある。

(清水睦美)

5. 仮説的なまとめー2グループの比較

本調査は、第二世代をターゲットとして調査を開始したものであるが、結果的には第二世代と1.5世代が混在する調査となった。在日外国人の20代～30代の青年期から壮年期にかかる人々は、第二世代と1.5世代が混在している様子が見え始める。そうした中であって、本調査は端緒に就いたばかりで事例も少ないため、本論文では第二世代を対象を絞り、かつ、2つのエスニックグループの比較については、違いが際立った親子関係と結婚、義務教育経験の善し悪し、ルーツの表出の3点について、仮説的なまとめを行うこととする。

(1) 親子関係と結婚

第一世代と第二世代は親子関係にあるわけだが、カンボジアグループでは、子世代が経済的に自立した後も、あるいは子世代の結婚後も、親子で同居したり、極めて近い距離に居住を構えたりと親子で濃密な関係をもっていた。カンボジアグループは、日本に住むカンボジア人の多くが関東圏在住であることから「凝集性」という特徴があり、そこではカンボジア本国の伝統的な「地位家族」が認められた。こうした場合(本論文では「親に取り込まれる」場合として指摘)では、家族のために高校を中退したり、仕事探しも同国人や両親の斡旋に頼ったりと、親世代を含む同国人コミュニティに依存する傾向が確認された。

これと比較すると、ベトナムグループは、比較的独立した家族関係をもつ傾向にあると言えるが、カンボジア家族に近い地位家族関係のもとにある者もいて、このような場合には、親子関係に大きな葛藤があることが確認できた。

このような親子関係のあり方の違いは、結婚における配偶者選択にも何らかの影響を及ぼしていることがうかがえた。ベトナム・カンボジアグループの子世代の配偶者選択では、一つのトレンドとして「『呼び寄せ』による結婚」がある。「呼び寄せ」は、「定住」「永住」の在留資格をもつ在日外国人が、母国に住む同胞と結婚することで、「定住者の配偶者」「永住者の配偶者」という在

留資格を得て、来日することを指している。本調査対象者のカンボジアの第二世代は、既婚の2人がともに「呼び寄せ」による結婚をしており、ベトナムは1.5世代であるV6が「呼び寄せ」による結婚をしている。

ベトナム・カンボジアグループの移動は「難民、政治／経済」であり、出稼ぎを目的とする南米出身者と比較すると、移動への積極性が弱いということが指摘されている。そのため、ベトナム・カンボジアの親世代は、母国からの脱出そのものが成功であり、その後は安心した生活を営めるかどうか成功の指標となる。「難民」として移動の主体となった第一世代にとっては、移動先である日本で自らの営為が通用するコミュニティを形成することは「安心」の指標であり、それが「呼び寄せ」という行為を作動させる要因となっていると推察される。

(2) 義務教育経験の良し悪し・転職傾向・学歴

義務教育経験の良し悪しについては、カンボジアグループが比較的「良い」経験をもつものに対し、ベトナムグループは「良／悪」が二分された。

4節で述べたように、ベトナムグループについては、義務教育経験の良し悪しと転職傾向に関連が見られた。この点については、既に述べたように、第二世代の子どもたちにとって、学校経験は家族外の社会への入口となっており、学校経験がよいことは、言語に不安を抱えつつも参入した社会がうまく受け入れてくれたことを意味し、それがその後に出会う社会への障壁を軽減するように影響しているという仮説を提示した。

一方、カンボジアグループに、ベトナムグループのような傾向は確認できなかった。ただし、学歴と転職傾向については、転職経験のない者は学歴が高いと同時に「カンボジア人」というルーツを支える資源を持っている傾向が確認された。このことは、カンボジア第二世代の特徴として指摘された「親に取り込まれない」と関連しており、「カンボジア人」というルーツを支える資源を、親や親戚以外に持ち得ると、親との距離を一定に保ちつつ「凝集性」のあるカンボジア人コミュニティに身をおくことができ、学校・ばいみー・日本人ボランティアといった「カンボジア」というルーツを支える資源となるものが、学歴獲得の手助けもしていると解釈できる。

(3) ルーツの表出

今回の調査では、ベトナム・カンボジアグループについては、現在は、全員が「ベトナム人」「カンボジア人」の表出を、積極的／消極的の違いはありつつも行っていた。その理由は、大きく2つある。一つは、本調査の対象者のほとんどは、いちょう団地という外国人の集住地区に居住して義務教育期間を過ごしていることから、外国人生徒が多くいて、そこでルーツを表出することは当たり前のことであったからである。したがって、V2のようにいちょう団地に居住経験のない者は、小中時代はルーツを隠すという経験をもっている。もう一つの理由は、既に述べたように、当該地域にあったS中学校が「外国人生徒のためのカリキュラム」を実施しており、学校全体として外国人性を肯定的に捉える試みを実施しており、S中学校での経験をもつものはルーツの表出に抵抗がなかったからである。

冒頭に述べたように、本調査研究は着手したばかりであり、かつ、本論の対象は、カンボジア・ベトナムにルーツをもつ第二世代で、かつ、男性ばかりという極めて限定的なものである。今後

は、対象者を女性に広げると同時に、南米・ラオス・中国などにも対象を広げて、包括的な比較検討をする必要があると考える。 (清水睦美)

【参考文献】

- 福岡安則 1993『在日韓国・朝鮮人ー若い世代のアイデンティティー』中公新書。
法務省 2013「在留外国人統計」<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001118467> (2014年9月11日アクセス)。
金泰泳 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えてー在日朝鮮人のエスニシティー』世界思想社。
中島知子 2010『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房。
Portes, A., & Rumbaut, R.G., 2001 *Legacies The Story of the Immigrant Second Generations* Russell Sage Foundation.
Rumbaut, R., G., 2002 'Served or Sustained Attachments? Language, Identity, and Imagined Communities in the Past-Immigrant Generation' in Peggy Levitt & Mary C. Waters, ed *The Changing Face of Home The Transnational Lives of the Second Generation*, pp.43-95.
志水宏吉・清水睦美 2001『ニューカマーと教育ー学校文化とエスニシティの葛藤をめぐってー』明石書店。
清水睦美、児島明 2006『外国人生徒のためのカリキュラムー学校文化の変革の可能性を探るー』嵯峨野書院。
ウォルマン, S., 1996『家庭の三つの資源ー時間・情報・アイデンティティー』河出書房出版。
Zhou, Min, and Carl L. Bankston. 1998. *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to Life in the United States*. Russell Sage Foundation.

※本研究は平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「ニューカマー第二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」(課題番号26285193 研究代表者:角替弘規)による研究成果の一部である。

世代	年齢	生まれ	国籍	第一言語	母国語	最終学歴	外国人姓表出	親世代との経済比較	小中経歴
C1	27	日本	カンボジア	日本語	×	大卒	◎(漢字名あり)	上昇	◎
C2	24	日本	カンボジア	日本語	聞◎話す○読書×	専門卒	◎(漢字名あり)	上昇	◎
C3	28	難民キャンプ(2歳来日)	カンボジア	日本語	聞○話○書×	高校(中退)	◎(漢字名あり)	上昇	◎
C4	27	日本	日本(帰化)	日本語	×	高校	○(漢字名あり)	上昇	◎
C5	32	難民キャンプ(7~8歳来日)	カンボジア	日本語	聞◎話○書×	大卒	◎	上昇	○
C6	27	難民キャンプ(生まれてすぐ)	カンボジア	日本語	聞話○書×	高校(中退)	◎(漢字名あり)	上昇	○
V1	27	日本	日本(帰化)	日本語	聞話○読書×	短大	◎(漢字名あり)	上昇	◎
V2	26	日本	日本(誕生)	日本語	聞◎話△読書×	専門	○(漢字名のみ)	下降	×
V3	23	ベトナム(6-7歳来日)	ベトナム	日本語	聞話○読△書×	高校中退	○(漢字名あり)	上昇	×
V4	20	日本(父ベトナム、母日本)	日本(誕生)	日本語	聞△話読書×	高校(定時)	○(漢字名のみ)	上昇	◎
V5	25	日本(インドネシア誕生)	ベトナム	日本語	聞話○読書×	高校(定時)	◎	上昇	◎
V6	1.5	ベトナム(8歳で移動)	ベトナム	ベトナム語	聞話◎読書△	中学	◎	上昇	○

小中成績	学校の友人	転職傾向	親・親戚以外のルーツを支える資源	親との交流	結婚(パートナー)
小：上、中：上	多	なし	学校・ばいみー	◎(別居)	未定(日本人)
小：中下、中：下	多	あり(4回)	中学校時代の先生・仕事先の日本人	◎(同居)	未定(日本人)
小：下、中：下	多	あり(5回)	中学校時代の友人・家族	◎(同居)	既婚(呼び寄せ)
小：中下、中：中下	多	あり(5回)	中学校時代の友人・家族	◎(同居)	未定(日本人)
小：中上、中：中上	少	なし	ボランティア教室の日本人・ばいみー	◎(別居)	既婚(呼び寄せ・子ども3人)
小：下、中：下	多	あり(6回)	中学校時代の友人・家族	◎(同居)	未定(日本人妻離婚歴あり)
中上・中・中下・上	多	なし	学校・教会	◎(別居)	既婚・日本人
中上・中下・下・中	多	あり(現在4回目)	×	△→○(同居)	未定(日本人/呼び寄せ)
中上・中上・下	いない	あり(現在10回目)	ばいみー	○→×(別居)	予定なし
中下・下・中上	多	なし	ばいみー	○(母同居・父別居)	未定(日本人)
下・下・中上	多	なし	学校	○(別居)	未定(在日ベトナム人)
下	小・ほとんどのいない	◎→(中卒後→結婚後)	学校	◎(別居)	既婚(呼び寄せ・子ども2人)